

### 1980年代世界の同時代史的研究

佐々木, 直美 / 南塚, 信吾 / 下斗米, 伸夫 / 加納, 格 / 伊集院, 立 / 今泉, 裕美子 / 木畑, 洋一 / 橋川, 健竜 / 小沢, 弘明 / 趙, 景達 / 山田, 賢 / 栗田, 禎子 / 永原, 陽子 / 高田, 洋子

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

科学研究費補助金研究成果報告書

(開始ページ / Start Page)

1

(終了ページ / End Page)

4

(発行年 / Year)

2009-05-20

## 様式 C-19

## 科学研究費補助金研究成果報告書

平成 21年 5月 20日現在

研究種目：基盤研究 A

研究期間：2005～2008

課題番号：17202014

研究課題名（和文） 1980年代世界の同時代史的研究

研究課題名（英文） Cross Regional Research of the World History in the 1980s

研究代表者

南塚 信吾 (MINAMIZUKA SHINGO)

法政大学・国際文化学部・教授

研究者番号：50055315

研究成果の概要：

本研究は、1980年代の世界史を、いわば輪切りにして同時代史的に分析し、それを一つの有機的に繋がる世界史として認識する視座と方法を探り出すことを目的とした。そして、まず、現代に繋がるグローバルな諸問題を確認した。それは、①グローバリゼーションの過程の始まり、②ネオリベラリズムの登場とIMFモデルの神格化、③市民社会論の台頭、④IT革命、⑤大量の人の移動などである。次いで、このグローバルな問題に対応して、世界の諸地域での根本的な変化を確認した。そして、アフリカやラテンアメリカでの構造改革から始まり、中越戦争、アフガン戦争、イラン革命の三つの変動を経て、ソ連や東欧での社会主義体制の崩壊、イスラーム主義の登場と湾岸戦争などにいたる世界の諸地域の有機的相互関係を析出した。

交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2005年度	12,000,000	3,600,000	15,600,000
2006年度	9,000,000	2,700,000	11,700,000
2007年度	8,800,000	2,640,000	11,440,000
2008年度	5,700,000	1,710,000	7,410,000
年度			
総計	35,500,000	10,650,000	46,150,000

研究分野：国際関係史、東欧史

科研費の分科・細目：史学・史学一般

キーワード：国際関係史、世界史、社会主義、イスラーム、新自由主義、グローバリゼーション

## 1. 研究開始当初の背景

研究開始当時、9.11以後の世界がグローバリゼーションとイスラーム原理主義の台頭とアメリカの一国主義によって変わりつつあるという一般的な認識しか持っていなかった。いわば、1990年前後の社会主義体制の崩壊からの時代を、ズルズルべったりの歴史としてしか認識していなかった。どこかで現代世界史の転機があったはずなのだが、それを意識してはいなかった。その転機の一つとして考

えてみたのが、1980年代という時代であった。これもそれほど強い確信があった選択ではなかった。社会主義体制の崩壊と湾岸戦争の前史として重要な意味を持つはずであるという程度の認識であった。

## 2. 研究の目的

本研究は、1980年代の世界史を、いわば輪切りにして同時代史的に分析し、それを一つの有機的に繋がる世界史として認識すること

を目的とした。1980年代に注目した理由は、それが1989年に東欧革命を生み出し、1990年にはソ連崩壊を導き、同時に湾岸戦争を招くことになった重要な過程であったからである。いったい世界史のどのようなメカニズムが、こうした大きな諸事件を生み出すことになったのか。そのような問題意識から1980年代を見ると、まず、そこには現代に繋がるグローバルな問題が登場していることに注目される。それは、①グローバリゼーションの過程の始まり、②IMFモデルの神格化、③ネオリベラリズムの登場、④市民社会論の台頭、⑤IT革命、⑥大量の人の移動などである。そして、このグローバルな問題に対応して、世界の諸地域での根本的な変化が生じている。たとえば、ソ連や東欧での社会主義の「改革」、アフリカの「脱アパルトヘイト」、ラテンアメリカでの「失われた10年」と言われる危機、イスラム原理主義の登場、アジアの「失速」など、多様である。この多様な世界を統一的に、有機的関係のなかで認識するために、1980年代をひとつの時代として研究対象とし、グローバルな要素を基礎としつつ、諸地域の発展の特殊性と相互の密接な連関を明らかにすることを目的とした。

### 3. 研究の方法

本研究は、全体の研究会での討議と、個別の研究の積み上げによって進められた。全体の研究会では、地球的規模での大きな問題と、地域の個別的な問題とを交互にあつかい、必要に応じて国内・国外の専門家を招いて研究を深めた。この間に、必要な調査を行うために、国外調査を行った。

便宜上、共同研究者に担当分野を以下のように割り当てて研究を進めた。総括班：南塚信吾、木畑洋一、下斗米伸夫；東アジア班：趙景達、山田賢；東南アジア・ミクロネシア班：高田洋子、今泉裕美子；ラテンアメリカ班：佐々木直美；アフリカ・中東班：永原陽子、栗田禎子；欧米版：伊集院立、橋川健竜；東欧・ロシア班：小沢弘明、加納格。

### 4. 研究成果

今研究の結果、1980年代を1970年代中ごろから1990年代初めまでの「長い1980年代」と捉えるほうがいいことが判明して来た。そして、まず第一に、今日問題になっているIT革命、金融経済のボーダーレスな動きは1980年代に始まっていること、これを支える特殊なイデオロギーとしての「新自由主義」もこの時代の産物であることが確認された。とくに、経済的にはIMFを通じた「構造調整」政策が、アフリカやラテンアメリカに始まって、「第三世界」に適用されていった。第二に、1980年代末からの社会主義体制の崩壊は、アフリカやラテンアメリカでは1970年代後半

から始まっており、1979年の中越戦争やアフガニスタン戦争によって80年代に深刻化する過程であることが明らかになった。

第三に、1979年のイラン革命によって、それまでの中東紛争とイランとがレバノンを中継して接続することになり、中東全体での対立が構造化されたことが判明した。

第四に、1979年の三つの大事件の結果、ソ連の体制の動揺が促進され、それが東欧と中東をソ連が切り離す政策につながったこと、それが1989年の東欧革命と、90年の湾岸戦争につながっていくことが明らかになった。東欧とソ連の社会主義体制の崩壊は、もっぱら国内の一党制や計画経済の硬直性などにその要因が求められてきたが、1980年代のソ連の体制的危機や西欧での新自由主義的宣伝などを重視する必要が明らかになった。

このような大きな国際地域関係の相互関係の中で、世界の諸地域の変容も進んでおり、とくに、中国やベトナムでは「市場化社会主義」のような道が選ばれてきたこと、アフリカやラテンアメリカや中東での巨大な社会的格差が生まれてきたこと（HIVもこの脈絡で理解しなければならない）が明らかになった。だが、半面で、ラテンアメリカでは「民主化」が進む時期であり、アフリカでは「脱植民地化」が展開する時期でもあった。

イスラム地域では、イラン革命を機に、イラン・イラク戦争によるイラク政権の変質、またイスラム原理主義の台頭があり、レバノンを介して、イランから発するイスラムの勢力が直接にイスラエルと対峙する形勢が出来上がった。イラン革命とパレスチナ問題の合流である。

本研究の最大の成果は、1980年代の諸地域の動きが相互関係の中で説明できるようになり、1980年代の全体的な展望が持てることになったことである。

### 5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計21件）

①南塚信吾、「世界史は動いている」、『歴史学研究』、No. 850、pp. 30-39、2009年2月、査読有

②南塚信吾、「世界史とヨーロッパ史」、『千葉史学』、第53号、pp. 144-166、2008年12月、査読有

③南塚信吾、「いまなぜ国民国家か」、人間文化研究機構連携研究報告書『いまなぜ国民国家か—国民国家の過去・現在・未来』人間文化研究機構、pp. 10-19、2009年3月、査読無

④木畑洋一、「グローバル・ヒストリーと帝国・帝国主義」、『グローバル・ヒストリーの挑戦』水島司編・山川出版社、pp. 91-99、2008

年 8 月、査読無

⑤小沢弘明、「歴史のなかの新自由主義一序論」、『歴史評論』、670 号、pp. 31-41、2006 年 2 月、査読有

⑥小沢弘明、「知識資本主義と新自由主義大学」、『科学』、77 巻 5 号、pp. 468-471、2007 年 5 月、査読有

⑦小沢弘明、「新自由主義時代の自由主義研究」、『人民の歴史学』、174 号、pp. 13-20、2007 年 12 月、査読無

⑧小沢弘明、「国民国家研究をめぐる一二のテーゼ」久留島浩・趙景達編、『アジアの国民国家構想—近代への投企と葛藤—』青木書店、pp. 267-282、2008 年 3 月、査読無、

⑨小沢弘明、「エトノスから見た帝国と国民国家—ハプスブルク帝国と後継諸国の事例—」、人間文化研究機構連携研究報告書『いまなぜ国民国家か—国民国家の過去・現在・未来』人間文化研究機構、pp. 48-53、2009 年 3 月、査読無

⑩永原陽子、「南部アフリカに『真実和解委員会』が残したこと—植民地主義の過去をめぐって—」、『慰安婦問題と一九九〇年代』金富子・中野敏男編・青弓社、pp. 163-175、2008、査読無

⑪趙景達、「海峡が隔てる差異—歴史社会的差異から見た日本と韓国・アジア」、『政経研究時報』、9-1、pp. 1-3、2005 年、査読無

⑫趙景達、「近現代日本の朝鮮認識と今日の岐路」、『近畿人権協会 NEWS』、第 3 号、pp. 5-8、2005 年、査読無

⑬趙景達、「グローバリゼーション下の歴史教科書—杉並の経験から—」、『歴史評論』、674、pp. 100-105、2006 年 6 月、査読有

⑭趙景達、「グローバリゼーション時代の思想と歴史研究—教育—朝鮮史と民衆史の立場から—」、『東京の歴史教育』、第 36 号、pp. 3-20、2007 年 7 月、査読無

⑮栗田禎子、「「移行期」のスーダン政治—南北和平・民主化・ダルフル危機—」、『地域研究』、第 9 巻・第 1 号、pp. 144-165、2009 年 3 月、査読有

⑯栗田禎子、「序 イスラームにおける知と権威の変容」、『日本中東学会年報』、Nr. 21-1、pp. 1-7、2005 年、査読無

⑰高田洋子、「開発と社会変動」、『地域研究の課題と方法—アジア・アフリカ社会研究入門—』北原淳他編・文化書房博文社、pp. 217-232、2006 年、査読無

⑱今泉裕美子「第 18 章キリスト教の功と罪—植民地支配がもたらした意識の変容—」「第 49 章日本統治時代の移民と産業—南洋の「楽園」に見た夢と現実」第 50 章 南洋興発株式会社・南洋拓殖株式会社—南進政策を支えた二大企業—印東道子編『ミクロネシアを知るための 58 章』明石書店、2005 年、pp. 90-94、228-232、233-237、2005 年、査

読無

⑲星野智子、「ラテンアメリカの一次産品輸出産業の新展開」、『ラテンアメリカレポート』第 24 巻第 2 号、pp. 2-9、2007 年、査読無

⑳星野智子、「メキシコ・テレコム企業のラテンアメリカ進出」、『ラテンアメリカレポート』、第 22 巻第 2 号、pp. 3-7、2005 年、査読無

㉑星野智子、「2006 年 7 月メキシコ選挙—亀裂を含めるメキシコ社会—」、『ラテンアメリカレポート』、第 23 巻第 2 号、pp. 4-9、2006 年、査読無

〔学会発表〕(計 4 件)

①南塚信吾、「東欧社会主義の崩壊と現代世界史」、第 5 回大阪大学歴史教育研究会、2006 年 4 月 22 日、大阪大学

②Shingo Minamizuka, *The Japanese Position in the World at the turn of the Centuries*, lecture at the World History Center seminar, 12, Oct. 2008, University of Pittsburgh

③栗田禎子、「スーダン国内の「周縁化された諸地域」に対する弾圧の歴史とその克服の展望」、日本国際政治学会 2008 年度研究大会「人権侵害と国家責任の比較研究」部会、2008 年 10 月 26 日、つくば国際会議場

④栗田禎子、「スーダンというトポス—植民地支配・周縁化・革命—」、千葉県高等学校教育研究会 歴史部会研究大会 記念講演、2008 年 6 月 27 日、千葉県立中央博物館

〔図書〕(計 7 件)

①南塚信吾、『世界史なんていない?』、岩波書店、2007 年、70 頁

②木畑洋一、『イギリス帝国と帝国主義—比較と関係の視座』、有志舎、2008 年 4 月、249 頁

③星野智子編、『ラテンアメリカ新一次産品輸出経済論—構造と戦略—』、アジア経済研究所、2007 年、210 頁

④高田洋子、『メコンデルタ フランス植民地時代の記憶』、新宿書房、2009 年、286 頁

⑤趙景達、『植民地期朝鮮の知識人と民衆』、有志舎、2008 年、313 頁

⑥永原陽子編、『「植民地責任」論—脱植民地化の比較史』、青木書店、2009 年、427 頁

⑦下斗米伸夫、『モスクワと金日成—冷戦の中の北朝鮮 1945-1961 年』、岩波書店、2006 年、310 頁

〔その他〕

Shingo Minamizuka, *The Significance of the Research Institute for World History*, in Manning Patrick ed., *The Global History in Practice*, Markus Wiener Publishers, 2008

研究者番号：

6. 研究組織

(1) 研究代表者

南塚 信吾 (Minamizuka Shingo)  
法政大学・国際文化学部・教授  
研究者番号：50055315

(2) 研究分担者

下斗米 伸夫 (Shimotomai Nobuo)  
法政大学・法学部・教授  
研究者番号：80132986

加納 格 (Kano Tadasi)  
法政大学・文学部・教授  
研究者番号：80204593

伊集院 立 (Ijuin Ritsu)  
法政大学・社会学部・教授  
研究者番号：30091854

今泉 裕美子 (Imaizumi Yumiko)  
法政大学・国際文化学部・教授  
研究者番号：30266275

佐々木 直美 (Sasaki Naomi)  
法政大学・国際文化学部・准教授  
研究者番号：90328914

木畑 洋一 (Kibata Youichi)  
東京大学・大学院総合文化研究科・教授  
研究者番号：10012501

橋川 健竜 (Hashikawa Kenryu)  
東京大学大学院・総合文化研究科・准教授  
研究者番号：30361405

小沢 弘明 (Ozawa Hiroaki)  
千葉大学・文学部・教授  
研究者番号：20211823

趙 景達 (Cho Gyondaru)  
千葉大学・文学部・教授  
研究者番号：70188499

山田 賢 (Yamada Masaru)  
千葉大学・普遍教育センター・教授  
研究者番号：90230482

栗田 禎子 (Kurita Yoshiko)  
千葉大学・文学部・教授  
研究者番号：10225261

永原 陽子 (Nagahara Yoko)  
東京外国語大学・アジアアフリカ言語文化  
研究所・教授  
研究者番号：90172551

高田 洋子 (TakadaYoko)  
敬愛大学・国際学部・教授  
研究者番号：50154795

(3) 研究協力者

星野 智子 (HOSHINO TAEKO)  
アジア経済研究所・地域研究センター・  
次長